

川嶋環のライフヒストリー (I)

～島小の女性教師の歩み～

高井良 健 一

Abstract

I explored the life of one woman teacher whose name is TAMAKI KAWASHIMA by the life history method in this paper. She was born in Gunma Prefecture in 1933. Her parents worked at their own silk fabric factory and her family had belonged to upper-middle class until the end of World War II. When she was second grade of primary school, World War II was occurred. Four years later, when she was sixth grade, World War II was finished. After War, her parents lost their own large fields of rice. This historical events had a potent influence to her life. She made up her mind to get a fulltime job and studied hard to enter the university which had been not available for women until 1945 in Japan. She became a teacher at Shima primary school in Gunma Prefecture which was famous for a strong learning community established by a principal KIHAKU SAITO. She had struggled for a couples of years to be a professional teacher who can produce ones own creative lessons. After several years' struggle, at last she felt herself to be a teacher of independent judgement. During her stay in Shima primary school, colleagues and a principal KIHAKU SAITO continued to give her strong supports to promote her professional growth.

はじめに

川嶋環(旧姓: 児島環)は、1933(昭和8)年、群馬県佐波郡伊勢崎町に生まれている。生家は伊勢崎銘仙の織元であり、二人の姉と一人の兄の四人きょうだいの末っ子だった。敗戦で生家の財政は大きく傾いたが、むしろこれをバネとして勉学に勤しみ、奨学金を得て群馬大学に進学した。大学卒業ののち、環は、1956(昭和31)年、群馬県佐波郡島村にある島小学校に赴任した。当時、島小は、卓越した指導力をもった斎藤喜博校長の下で、戦後の日本教育史に燦然と輝く数々の珠玉の教育実践を創出しており、映画監督、カメラマン、文

川嶋環のライフヒストリー（I）

化人、教育研究者、教師らをはじめとして、全国から多数の参観者を集めていた。環は、この島小において、教師としてほぼ白紙の状態から教職生活を出発し、斎藤喜博や同僚の教師たちに厳しく鍛えられながら、温かいケアも受け、全力を尽くして教師の仕事、とりわけ授業について学び、こののち、60年もの間、斎藤教授学の継承者として、教師、そして教師教育者として、全国の子どもたちや教師たちに大きな影響を与えることになる。

ところで、児島環は、1960（昭和35）年に、島小の子どもたちと教師たちの姿を撮り続けていたカメラマンの川嶋浩と結婚し、以後、川嶋環として活躍することになる。川嶋浩が撮影し、斎藤喜博が文章を綴った写真集『未来誕生』は、島小の記録を今にとどめるものとしてあまりにも有名である。

さて、環は、1956年から1964年まで島小で勤めたあと、家庭生活との両立のため、東京都に移っている。東京では、二人の男児の子育てをしながら、新宿区、三鷹市の小学校教諭として1993年の定年まで勤めている。高度経済成長を経て、さまざまな教育病理があらわれた世相のなかで、都市部の公立小学校の教諭として、教職生活を全うしたわけである。教育研究の世界においても、島小は、すでに歴史の一部であり、高度経済成長以前の農村を舞台とした一つのユートピアと見なされているように思われる。ところが、川嶋環のライフヒストリーが示しているのは、島小で培われた教育哲学とそこで鍛えられた授業技術は、高度経済成長以後の都市においても通用する、より普遍的なものであるという事実である。2015年、すでに川嶋は82歳となっている。ところが、川嶋が教壇に立ち、子どもたちを学びの世界に誘うことで、普段は反抗的な子どもたちも学びの愉悦に引き込まれ、授業の終わりには満面の笑みにあふれるのである。この実践的な事実は、島小の教育哲学と授業技術が決して過去の遺物ではないことをあらわしている。筆者が川嶋環のライフヒストリーを叙述する理由はここにある。

ところで、筆者が川嶋とはじめて出会ったのは、2009（平成21）年に東京大学駒場キャンパスで開催された日本教育学会のラウンドテーブルにおいてであった。これを遡ること20年余、1980年代の後半、筆者が、斎藤喜博の著書を通して島小の教育実践に出会ったとき、すでに斎藤喜博は故人であり、島小とは遠い昔の伝説のような存在であった。そして、高揚感なき政権交代を間近に控えた2009年夏、島小を研究室の書棚に押し込めていた筆者の前に、もう完全に歴史であり、伝説であると思込んでいた島小の教師が凍とした姿であられたとき、心が打ち震える思いであった。

少し落ち着いて考えてみると、斎藤喜博が島小で校長として教育の仕事を深めたのは1952（昭和27）年4月から1963（昭和38）年3月までの11年間である。2009年から遡ると、46年前のことであり、斎藤校長の下で活躍した教師がまだ健在であっても不思議ではない。だから、もしそこで島小の教師がかつての思い出話を語るだけだったら、それほど心が打ち震えることもなかっただろう。感銘を受けたのは、新任期に斎藤喜博校長から学んだ

一人の女性教師が、70代になったその時もお自らの教育実践を鍛え、教師としての成長を重ねて、教育を志す私たちの心を揺さぶる言葉を紡ぎ出しているという事実によってであった。

その日以来、川嶋環は、筆者にとって、教育実践と教育研究における偉大なる師であり続けてきた。そして、東京では、川嶋による数多くの示範授業を参観し、沖縄では、川嶋とともに小学校で授業も行った。川嶋のすべての子どもたちへの深い愛情と確かな教育技術に裏打ちされた圧倒的な授業を目の辺りにして、学びに対する希望とともに、目眩がするような教育の世界の深みを示してもらった。どこの学校に行っても、どこのクラスに行っても、子どもたちは誰もが川嶋のことが大好きであり、教師たちは川嶋の温かい言葉に救われるのであった。

このような川嶋環がどのような経験を重ねて、絶えざる成長を求め、学び続ける教師となったのかを明らかにしたいと考え、また、島小の教師の経験世界を可能なうちに少しでも記録しておきたいと思い、2014年3月から5月にかけて4回にわたるライフストーリーのインタビューを行った。インタビューはすべて、東京都内の川嶋の自宅にて筆者と一対一で行った。一回のインタビュー時間は2時間から3時間であり、インタビューはすべて逐語訳のトランスクリプトに起こしている。

第一回目の報告となる本研究ノートでは、1回目と2回目のインタビューを資料として、川嶋（児島）のおいたちから被教育体験、そして島小での経験について、叙述している。今回の叙述は、島小から東京都に移ったところまでを扱っており、これ以降の歩みについては、次稿で扱うことになる。また、さまざまな島小研究や島小の教師研究、斎藤喜博研究と重ねながら、ライフヒストリーを論題で構成する作業も、今後の課題となる。

(略年表①)

西暦（元号）年	節目となる出来事	備考・時代背景
1933（昭和8）年	誕生（群馬県佐波郡伊勢崎町）	生家は伊勢崎銘仙の織元
1940（昭和15）年	小学校入学	伊勢崎町、殖蓮村、茂呂村が合併し、伊勢崎市誕生
1941（昭和16）年	小学校は国民学校となる	国民学校令 真珠湾攻撃 アジア太平洋戦争
1945（昭和20）年	国民学校6年次に敗戦を迎える	敗戦 戦後改革
1946（昭和21）年	旧制伊勢崎高等女学校進学	日本国憲法公布
1949（昭和24）年	新制伊勢崎女子高等学校進学	中華人民共和国成立
1952（昭和27）年	群馬大学進学	斎藤喜博、群馬県佐波郡島村島村小学校に校長として着任

川嶋環のライフヒストリー（I）

1955（昭和30）年		三郷村，豊受村，名和村，宮郷村が伊勢崎市に編入 采女村，剛志村，島村が境町に編入
1956（昭和31）年	群馬大学卒業 群馬県佐波郡境町立島小学校赴任 6年担任	
1957（昭和32）年	1年担任	
1958（昭和33）年	2年担任	
1959（昭和34）年	3年担任	
1960（昭和35）年	1年担任 写真家の川島浩と結婚（4月）	安保闘争／三池争議
1961（昭和36）年	2年担任 長男出産（6月） 公開授業「雨水」	
1962（昭和37）年	3年担任 授業「花から実へ」	
1963（昭和38）年	4年担任	斎藤喜博，島小学校から境町東小学校に転任 東京オリンピック開催
1964（昭和39）年	分校 5年担任 東京都教員採用試験受験，合格	
1965（昭和40）年	東京都新宿区四谷第三小学校 1年担任	
1966（昭和41）年	2年担任	
1967（昭和42）年	6年担任	
1968（昭和43）年	担任	
1969（昭和44）年	担任	
1970（昭和45）年	担任	大阪万国博覧会開催
1971（昭和46）年	担任	
1972（昭和47）年	5年担任 次男出産	

（一）おいたち

児島環は，1933（昭和8）年4月13日，群馬県佐波郡伊勢崎町に生まれている。生家の職業は，伊勢崎銘仙の織元であり，小作の人たちに田畑も貸していて，裕福な家庭だったという。きょうだいも，姉が二人と兄が一人であった。環は末っ子として周りから大層可愛がられて育った。

それでも，裕福な家庭とはいえ，両親の教育方針で「お手伝いの女の子，お台所する子と一緒に寝かされたり」（①4頁），決して甘やかされることはなかった。のちに長姉が戦災孤

児を自宅に連れて帰り、一緒に生活を送ったというのが、自分たちだけが良ければそれで良いという家風では決してなく、周りの人々、困っている人々に対して救いの手を差しのべる家風の家であった。銘仙の織元は、家内工業であったから、家族も貴重な働き手であった。環が生まれた頃、父母は38歳ぐらいだったというのが、ともに家業に勤しんでいた。内と外がつながったような、たくさんの人々が入り出す家内工場のなかで、幼い環のことは「お手伝いさんが、育てたみたいなきもち」(8頁)だったと回想している。

きょうだいの年齢は、長姉は環より一回りほど年長であり、次姉は8歳ほど年長であったという。その次の三番目の姉は4歳ぐらいで亡くなっており、その下に環より5歳年長の兄がいた。環は、お手伝いさんや働き手も家庭に同居しているなかで、「家族があるかないかみたいなきもち」(8頁)というように、風通しがよく、賑やかな環境のなかで、その幼少期を過ごしている。環はその幼少期を「わがままいっぱいでしたね」「なんでも、なんでも通ると思っていました」(10頁)と振り返っている。

(二) 小学校から国民学校へ

このような環であったから、家庭という小宇宙を離れるのは大変なことだった。小学校に入ったとき、「学校に慣れなくて3日間泣いた」(13頁)こともあったという。「家で、あんな広いところで好き放題に遊んでいたから、もう、母親と離れるのが嫌でね」(14頁)というように、家庭は居心地のいい場所だったようだ。

環が小学校に入学したのは1940(昭和15)年のことであった。すでに日中戦争は始まっていたが、戦争の暗い影はまだ感じられなかったらしい。それよりも、環はほかの子と違う自分の服装のことが気になっていた。末っ子の環は、着せ替え人形のように可愛がられ、姉が女学校の洋裁で作ったハイカラな洋服を着せられ、その上、帽子まで被せられて、学校に送り出されたという。あまりの目立つ格好に、自宅を出たあと、帽子はカバンに入れて隠していたそうだが、周りとは違う服装は子ども心に受け入れがたく、悩みの種だったようである。

それでは、環が受けた学校の授業はどのようなものだったのだろうか。1年生の時は「わりと、昔からいた年配の女の先生で」「まあ、授業面白かったんでしょね」(22頁)と振り返っている。まずまずの滑り出しだったようだ。ところが、翌1941(昭和16)年に2年生になった時、小学校は国民学校とその名称を変えた。そして、この年の12月8日、日本政府は真珠湾攻撃を執行し太平洋戦争に突入した。開戦当初は、「最初はもう、景気良くて、シンガポール陥落なんて言っていて、旗行列して」(19頁)という状態で、前年に市となった伊勢崎の街も戦勝ムードが漂っていたらしい。環もまた、その後の事態の展開は予想だにできなかったという。続く1942(昭和17)年の4月には3年生となった。この時代、3年生になると男子と女子の教室が分かれるのが通例であった。ところが、男性教師が急遽、出征しな

川嶋環のライフヒストリー（I）

くてはならなくなり、その後任も見つからないという事態が生じた。そのため、3学年の四つのクラスのうちの一つの男子クラスが三つに分けられて、残りの三つのクラスに割り振られて、すべてのクラスが男女混合となったという。戦争のしわ寄せが子どもたちの生活にも波及してきたのである。

さて、環は3年生の担任教師にはなついていたが、宿題をしてこないため、居残り勉強をさせられることもあった。居残り勉強に不満だった環は、「砂場行って、バケツに砂入れて、教室にばーって撒いちゃって」（24頁）、叱られて立たされたこともあったという。自由奔放で直情的な子どもらしい児童だったのだろう。3月に進級するときにその教師から手紙もらったそうだが、その手紙には「環さん、お山は高いよ、ぐんぐん登ろう」（25頁）と書いてあったらしい。この教師は、自由奔放な環がもっていた潜在能力をどこかに感じ取っていたのかもしれない。

1943（昭和18）年の4月には4年生となった。4年生の担任教師は、高等女学校を卒業したばかりの17、8歳の若い女の先生であり、「勉強なんか教わったか教わんないかわかんないです」（21頁）、「教科書読むだけでおしまいです」（22頁）という状態で、しょっちゅう神社詣でをさせられていたという。「姉の友達と女学校が同級生で」「何、あの人が先生してるの？　なんてニュースが入っちゃうから」（27頁）尊敬するのも難しかったのだろう。教育勅語を覚ええない環は、その教師からみんなの前で恥をかかされたこともあり、「もう嫌だ」（27頁）と思ったという。

このように教師からはにらまれるような環であったが、「遊びが上手」（31頁）で友達からはとても人気があったという。そして、人気で級長に選ばれたものの、教師から途中で辞めさせられたこともあった。教師が不足する時代のなかで、教師の知識や能力も十分ではないということもしばしばあった。一方で、環も教師の期待に沿うのではなく、自分に正直な子どもであったから、「教師にとっては扱いにくい子だったんでしょうね」（30頁）というところがあった。この頃、環は、ビー玉遊び、メンコ、馬乗りなど、男の子が好むような外遊びが大好きだった。遊びに夢中で「5年生までは、勉強した覚えがないですね」（30頁）と語っている。現在もなお、環は体力があつて運動能力も高く、その上、二人の息子が揃って体育の教師になっていることから、この頃の環が身体能力に恵まれた活動的な子どもだったということが容易に想像できる。

そして、5年生の頃、1944（昭和19）年になると、いよいよ戦争の爪痕が伊勢崎においても明らかに感じられるようになってきた。「今日は無言の凱旋ですから、皆さん並んで下さい」（42頁）と整列させられ、白い箱に入った出征兵士の遺骨が帰ってくることもあった。群馬の内陸である伊勢崎にも空襲警報がしばしば発令されて、学校で落ち着いて勉強できる環境ではなくなっていた。

そんななか、6年に進級すると、1945（昭和20）年4月に母親が学校に呼び出されて、

「この成績では〔高等女学校に〕受かりません」(43頁)と言われたのだった。姉も、兄も、高等女学校、中学校にそれぞれ進学していたので、教師が心配して母親を呼び出したのだろうと、環は語っている。この時、環は進学できなくても「織り子になるからいいわ」(45頁)と思っていたそうだが、しょげていた母親から「行かなきゃ行かないで他の道あるから、そっちでがんばれば大丈夫だよ」(46頁)と慰められたのに発奮して、一念発起し勉強することになった。末っ子だったので気づきにくかったが、環は、負けず嫌いな性格だったのだ。それからは予習復習を欠かさず勉強して成績も向上したところで、この年の8月に日本は敗戦を迎えることとなった。この敗戦という出来事は、児島家、そして環の人生を大きく変えることとなった。環は、敗戦の日まで日本が負けるとは思っていなかったという。だから、「終戦まで、絶対勝つと思っていた」(52頁)のである。空襲もひどくなっていたのにどうしてそう思われたのですかというインタビュアーの問いに対して、「だって、そういう教育されてるから」(49頁)と応答している。そして、「教育は恐ろしいですね、信じ込むから」(52頁)と戦前の教育を総括している。

(三) 敗戦、そして高等女学校へ

戦時中、日本が神国であり、不敗であることを教え込まれていた環は、敗戦に伴って、今度は、教科書に墨を塗らされることとなった。墨塗り教科書を直に経験し、これまで学んできた教育内容が否定されるなかで「学校なんか信じられない」(58頁)という気持ちに苛まれながら、「でも、算数とか、理科とかは、その思想によってどうこうじゃないでしょ？」(52頁)と、科学に活路を見出していく。その後、環が理科系の教科に関心を深めていったのは、敗戦による文科系の教科に対する不信感と関係があったかもしれない。

そして、思想問題以上に切実だったのが、経済問題だった。「世の中が一変したと同時に、家庭の暮らしも一変しちゃうんです」(62頁)というように、それまで裕福だった暮らしが、「売り食い」(62頁)の生活に取って代わられることになる。戦後の農地改革で、土地の大部分を失い、織物業もすたれて、生計を立てる手だてがなくなったのである。追い打ちをかけるように、一家の大黒柱である父親が結核に罹り、あとはひたすら自宅にあった着物を農家に売りながら、生活を成り立たせることになったのである。

戦後の混乱のなかで、環は、伊勢崎高等女学校に進学するが、そこで「職業持とうと決心」(67頁)することになる。敗戦で目の辺りにしたように、財産はいつどのようなかたちでなくなるかわからない。だけど、「どんな世の中がきても、職業持ったら、生活できる」(67頁)と思い、職業をもつという決心をしたのである。この時代の多くの女性たちと同じように、家業を手伝ってはいたものの、専門的な職業をもっていなかった母親は、戦争に負けて、夫が病気になる、着物を売って生計を立てるしかない状況に追い込まれた。その姿

川嶋環のライフヒストリー（I）

を目の辺りにして、「女性だって、仕事持てれば、どんな世の中がきても、生きていける」（67頁）と考え、勉学に勤しむことになったのである。そういう意味で、敗戦こそが、環の人生を大きく変えたといえる。

敗戦という出来事は、「12歳の子どもにとって」「ものすごい、精神的なショックですね」（68頁）という衝撃であったが、環はこの逆境を「そいで、もうそこで、仕事持とうって」「仕事持つのには、やっぱり勉強しないと」（68頁）という思考に転化したのであった。そして、この思考に基づき、環は、中学校、高等学校時代、勉学に精力を注いだ。この時に決意した仕事を通じた自立の追求という考え方は、生涯変わることがなかった。

理科系の教科を好み、数学の成績で優より上の秀をもらうように学力をつけていった一方で、文学においても、小川未明、宮沢賢治、新美南吉などを「夢中になって読み」（71頁）進めた。戦時中、学べなかった部分を、ここで取り戻していたように思われる。

（四）新制高校

環の世代は、学制改革の谷間の世代であった。旧制高等女学校に入学したが、その途中で学制改革があり、旧制高等女学校は新制高等学校に変わる事となった。そして、小学校と高等学校の間には、新制中学校も誕生した。結局、環は、旧制高等女学校（中学校）、高等学校と6年間を同じ校舎で過ごす事になった。「私たちのように6年から高等女学校受けた子は、公立の中学じゃなくて」「今の高校の併設中学校で、3年勉強して」（86頁）、新制高校に進学することになったのである。不思議なことだが、小学校を卒業のち旧制中学校や高等女学校に進学することなく高等小学校に進んだクラスメートと、高等学校で再会することになったのである。戦前の複線型の教育課程ではありえないことであった。敗戦によって、格差社会が組み替えられたようであった。

環によると、「むしろ、公立の中学校から高校入った子が、大学まで受けました」（87頁）ということもあったという。彼女たちは、1946（昭和21）年4月に高等小学校に進んだ時点では、将来、大学に進むとは夢にも考えていなかったはずである。そもそも戦前、戦中、女子に大学進学は許されていなかった。また、当時、良妻賢母が女性の模範的な生き方だったために、高等女学校で学んだ仲間がむしろ普通科の高等学校や大学進学を選ばずに、「家庭科系統の学校に行ったりして」（87頁）、高等小学校と高等女学校の間にあった従来の格差が逆転することもあったという。このときの教育の風景は、戦後の学制改革によって生じた、わずかな期間のユートピアであったといえる。

環は、この時期のことを振り返り、「面白い時代でしたよ」「もうめっちゃくちゃな時代です」（87頁）と表現している。「今まで小作農だった人が、羽振りが良くなって」（88頁）、「あの頃は、こんな農地解放なんかあったから、大変な思いをする人がいるんだなんて、子ども

心には思っていたけど」(88頁)、「今になってみれば、あら、良い政策だったんじゃないって」(89頁)と、自らは不利な立場に立たされたにもかかわらず、実家の不運を笑い飛ばして、社会的な平等を促した政策を肯定している。

これに続いて、「今考えてみて良かったのは、こう貧富の差があるから、学校に行かれないっていうのがなくなったんですよね」(89頁)、「だって、貧しいがために、勉強できなかったら、頭がせつかく良い頭を持っていて……もったいないですよね」(89ページ)と、戦後の学制改革を総括している。もちろん、環が大学まで進学できたからこそ、戦後の学制改革は肯定されているのだろうが、思春期の自己を形成する時期に戦後教育の理念と出会ったことが、環の教育哲学に深い影響を与えていることも見逃せないように思われる。

環は、この激動の時代を経験してきたことの意味を、「いろんな経験してきたから、小学校の時そんな勉強できなくても、やる気になった時には伸びていくんだっていうふうな、すっごく強く感じて」、「教師になってから、やっぱり、その、トップになんなくてもいいから、その、基本だけはしっかり覚えておきなさいよって子どもに言うのね」(89-90頁)と、自らの教育観の形成につなげて、位置づけている。環の教育観は、戦前、戦時下の教育と戦後教育、その両者の亀裂を自らの生き方において受け止め、その変革の意味を自分の人生の選択において積極的に位置づけたところから立ち上がっている。このように考えると、川嶋環という一人の卓抜な教師は、その土台に戦前の教育の経験をもちながら、戦後教育の理念をその人生において深く受け止めることによって創られたということができよう。

環が併設中学から新制高等学校に進学するときに、入学試験は存在しなかった。そして、高等学校では、社会科の教師である服部先生と出会う。この出会いは、「服部先生がいなかったら、私は、大学は行ってない」(93頁)というような、決定的な出会いであった。服部先生の授業では「労働基準法なんか教わった」(94頁)という。まだ30代前半ぐらいの若い男性教師であり、「これからは、女性も職業持つ時代が来る」(102頁)と語り、環に、強く大学進学を薦めた。服部先生の言葉を受けて、環は大学を受験するのだが、実は大学受験については両親には内緒のまま決行したのだった。

高校時代、環は一生懸命勉強していたという。というのも、「勉強しなきゃ、みなさんについていけないんだと思って」(126-127頁)、人の二倍努力しようと考えたからだ。そして、この時に勉学に勤しんだことが、のちの人生において「すごくためになって」(127頁)おり、教職生活は「あの時に、一生懸命やってたのが、もとになってい」(127頁)ると振り返っている。高校時代には、服部先生のほかにも印象に残る教師との出会いがあった。例えば、「理科の先生が素敵な先生で」(129頁)、生物の時間にはヤギの解剖を経験するなど、「やりたいことなんでもやらせてくれた」(129頁)という。さらには、「化学の先生も素敵な先生で」(130頁)、環は、理科を夢中になって学んだのである。

進路選択においては、教師に「恵まれない人の、力になるような、仕事を選びなさいって

言われ」（133頁）、それならば医者かあるいは教師だと考え、群馬大学を受験することにした。

（五）群馬大学

群馬大学を受験することに決めたのは、当時は教養課程において教育学部と医学部は共通であり、3年進学時に選択することになっていたからである。環は、医学部に進学し、将来は北海道の無医村で働きたいと考えていたそうである。ところが、大学時代は、真面目一筋だった「自分を変えなきゃ」（172頁）ということで、「映画もきちっと観に行ったり、スキー、スケートも行ったし、あの、男の子なんかと、男の学生のなんかとグループになって山登りしたり」（172頁）と学生生活を満喫していたため、医学部への進学のための試験に落ちてしまった。こうして、教育学部への進学が決まったのだった。高校時代、「微積が面白かったり」「理科の実験が面白かったり」（149頁）というように、ひたすら勉強に打ち込んでいた環にとって、大学時代の自由な時間は、これもまた大切な時間であった。

当時、大学の学生寮は一ヶ月100円で、食費が1800円、授業料は一年間で3600円だったという。奨学金が一ヶ月1800円で、授業料免除にもなったので、ほぼ自活が可能だった。このような社会的な条件が備わっていたからこそ、高校教師も環に両親に黙っての大学受験を薦めることができ、両親も受験に合格した環の進学を認めたのだった。

大学時代には、少しの家庭教師をしたほかには、アルバイトをすることもなかったが、気前のいい叔母さんがいて、折りにつけてお小遣いをくれたので、親からの仕送りなしに生活できたという。環の周りには、困っている人を助ける人々が必ずいるのだった。その後、小学校の教師として長年勤務したため、奨学金の返済も免除となった。向学心のある貧しい若者に優しい時代であったといえる。そして、化学の荻野先生には、厳しく指導を受けて、試験管の持ち方からはじまって化学の実験の基本を教わったという。大学時代に実験器具の使い方をしっかりと学んだことは、教職に就いてから大いに役立つことになる。卒業研究では、「サボニンの成分」についての研究を行っている。指導教官から懇切丁寧な指導を受けたという。教育実習は、附属小学校と公立中学校で行っている。ただ、中学校のほうは全く覚えていないとのことだが、それでも、「附属の子はよくなついてくれて」「誕生日まで呼んでくれて」「すごく楽しかった」（198頁）そうだ。

ただ、親の薦めで入った寄宿舎暮らしでは、厳しいこともあった。4人部屋だったが、「ある日、三人が私と口きかなくなっちゃった」（166頁）というようなショックな出来事もあったという。その理由は、環が「勉強するのが面白かった」（167頁）あまりに、自由時間にも、数学の話など、勉強の話ばかりするからというものであった。環は自分自身に「人間的な部分が欠けていた」（167頁）と反省し、「やっぱり、自分を変えなきゃダメだなと思

って」(169頁)、「すごい、それは努力しました」(169頁)と周りの人々の関心にも心を配るようにした。環は真の強い心の持ち主だった。このように人間関係でのトラブルがあっても、決して周囲の人々を恨んだり憎んだりせず、自分自身を育てる機会とした。このような心の強さがあったからこそ、のちに斎藤喜博校長の厳しさを自分の糧にすることができたにちがいない。

(六) 斎藤喜博との出会い

環の人生に決定的な影響を与えることになる斎藤喜博校長との出会いであるが、このテーマについてはこれまでさまざまなヴァージョンの語りが語られてきた。おそらくこのトピックだけでも一つの研究になりうるだろう。それだけ環の人生において斎藤喜博との出会いは大きなものであり、また多義的なものでもあった。今回の第一回目のインタビューでは、大学時代に教育関連科目の講義において斎藤喜博の教育実践がしばしば紹介されていたので、「斎藤先生のところで、仕事させてもらいたいな」(160頁)という願いを温めていたというストーリーが語られた。そして、「友達の、お父さんが伊勢崎市の教育長だった」(161頁)ことから、鳥小学校(以下、鳥小)で仕事をしたいと考えている学生がいるという話が、斎藤喜博の耳に入り、その自宅に呼ばれたというストーリーが語られている。

このストーリーにおいては、幼稚園、小学校、中学校、高校の教職免許を取得した環が、小学校を選んだのは、まず「斎藤喜博先生がいたから」(191頁)であり、次に「人間を育てるところが小学校」(192頁)と考えたからだという決断の理由が導かれている。そして、この前提から、鳥小での新任教師時代が幕を開けるのである。

ところが、第二回目のインタビューでは、別のヴァージョンの語り語られた。第二回目のインタビューは、次のような語りから始まっている。「[なぜ]鳥小に決まったかっていう話なんですけどね」「斎藤喜博先生っていうのは、もう群大[群馬大学]でも有名な方だったんですね」「だから、講義の中で、教育関係の先生は必ず斎藤喜博って話したんです。」「だから学生時代から、斎藤喜博っていうのは知ってたんですね。」「できれば、逃げたい学校だったんですよ。」「そんな研究熱心な学校なんか、私には向かないと思って。」(②1頁)第一日目のストーリーとは、大きく違うことがわかるだろう。

この二つのストーリーはどちらが正しいのだろうか。いや、そのように問うことは人の生の豊かさを捨象することにつながりはしないだろうか。おそらく、これらのストーリーはいずれも正しいのだ。大学生だった当時の環にとって、斎藤喜博校長の下で教師として学びたいという願いももちつつ、そのような厳しい学校で果たして務まるだろうかという不安も共存していたにちがいないのである。その揺らぎが、語りの異なるヴァージョンというかたちで表現されていると考えることができなだろうか。

川嶋環のライフヒストリー（I）

また、一度目のインタビューでは正式に着任する前に、環が齋藤の自宅を訪ねたことになっているが、二度目のインタビューでは、齋藤が環の自宅を訪ねたことになっている。こちらはおそらく事実はどちらか一つだろう。校長が新任教師の品定めを行うことはありそうなことであり、おそらく齋藤が環の自宅を訪問したというのが真実だと思われる。ただ、のちに環が齋藤の自宅に泊まって授業案を作成するなど、この時代の島小の教師たちは、お互いの生活をさらけ出しながら、学びを深め合っていたのであり、環の語りの混乱はそのことの証しであったともいえるだろう。

さて、齋藤が環の自宅を訪問したときのエピソードとして、齋藤に、学生運動に参加したかどうかを尋ねられて、環がしていないと答えると、「学生運動一つしないようなのは使いものにならない」（②6頁）と言われたことが語られている。このエピソードはこれまでのたくさんの語りのヴァージョンにおいても共通した内容となっている。一般的に言って、日本社会では、就職に際して、「学生運動をしたか」と問われて、「した」と答えると、不利益を被る可能性がある。この常識が前提となっていて、齋藤が常識を覆すような応答をしたものだから、環は驚いたのだろうし、何度もこのストーリーを語るようになったのだろう。常識を覆すストーリーは、人々に印象を与えるものだから、繰り返し語られやすいのである。

とにかく、環の語りによれば、齋藤は、はじめから環にぞっこんというわけではなかったようである。環の生真面目なところが気に入らなかったのかもしれないし、日本社会の旧弊にうんざりしているあまりに、若い教師たちに社会変革への願いをもってほしいと願っていたのかもしれない。ともあれ、齋藤は、教育者として、どんな子どもに対しても分け隔てがなかったように、どんな教師に対しても、まずは来る者拒まずの鷹揚な構えで選り好みをすることがなかったと、環は語っている。そのため、環に選択権がある状態となり、最終的には、実際に、島小の卒業式を見学し、「卒業式が素晴らしかったから、あっこういう学校でやってみたいと思って」（②56頁）、島小に赴任することを決断したというのである。

（七）島小に赴任

環は、島小に赴任した当初、「知ってることを、子どもに、知識の切り売りすれば、授業だって思って」（②14頁）いと語っている。これは新任期の教師たちの多くがもっている一般的な授業観だといえる。だが、齋藤喜博校長の授業観は、これとは全く違うものであった。

齋藤の授業観では、学びの中心にいるのは子どもだった。したがって、始業のベルもなく、「子ども疲れたから『うん、じゃ、休み時間にしよう！』みたいな」（②15頁）ゆるやかで柔軟な時間割のなかで、教師たちは仕事をしていた。このようなゆるやかな枠組みの下では、一人ひとりの教師の授業の質が子どもの学びの質に直接に反映する。新任教師の門出として

は、なかなか厳しい環境だったといえる。

環も「私は、もう授業が、その、下手、下手っていうか授業の方法がわからないから、子どもは、勝手なこと、勝手になっちゃうわけ、暴れちゃうわけですね。いなくなっちゃうんですよ、逃げちゃって」(15-16頁)というにっちもさっちもいかない状況に直面することになった。環が島小の1年目に担当したのは6年生で、これは「希望出して、そして一日かけて話し合いです」(18頁)という齋藤校長の学校運営方針によるものであった。6年生を希望したのは、環本人だった。6年生ならば、文字も読めるし、大丈夫だろうと考えたのだった。それにしても、全国から注目されている島小で、しかも、もっとも注目されるであろう6年生の担任を、海のものとも山のものともつかぬ新任教師に任せるといふ齋藤校長の度量には、驚嘆せざるを得ない。見栄えをよくしようと格好をつけるのではなく、ありのまま勝負をするというのが、齋藤喜博の教育哲学だった。ただ、教師はその分、かえって大変であった。

案の定、環の教室は、新学期が始まると「希望通り6年になったけど、もう、学級崩壊です」(24頁)という状態に陥った。とくに「男の子は、やっぱり不満、あの授業に満足がいけないから」(26頁)と振り返っている。実は、男子の反撥の背景には、若い女性教師への憧れの気持ちのゆえに、家庭的な困難を抱える子だけでなく、自分たちのこともかまってほしいという思いもあったらしい。これはのちに同窓会を開催したときにわかったことだという。それはともかく、これまで島小の質の高い授業で鍛えられてきた子どもたちにとって、新任の兎島の授業は、その知的好奇心を十分に満足させられるものではなかったのである。また、島小は、全学年単級であったから、環は、同じ学年の教師に相談するわけにもいかなかった。仕方がないので、環は、何とか試行錯誤しながら、授業づくりを行っていた。

今の時点から「例え小学校1年でも2年でも、今やっていることが、先々どうつながるかかって見通しが、ないと、授業っていうのは成立しないんですよ。本当はね」(②36頁)と振り返るが、この当時は、もちろん、このような見通しをもつことはできなかった。それでも、大学時代に学問の楽しさと出会ったことで、日曜日に子どもたちを化石掘りに連れて行ったり、生物の解剖をしたり、時折、子どもたちに印象の残る学びを行っていた。こうした学びを準備できたのは、戦前の師範教育ではなく、戦後の大学教育を受けてきたためであると、環は振り返っている。「喜博先生が言う、専門的な解釈っていうのができないと、本当の授業はできないんですね」(②36頁)と語り、「だからそういう意味で、私たちはいい時代を過ごしたなって思う」(②36頁)と、自らの戦後の大学での学びを肯定的に評価している。

環が島小に着任したときに、齋藤校長は「自然科学は、僕は専門じゃないから教えられない」から「誰かいい先生を選べ」(②37頁)とアドバイスを送り、「ただ、それをどう授業するか、教育の分野については、僕じゃなければ、教える人はいないぞ」(②37頁)と語っ

川嶋環のライフヒストリー（I）

たという。そして、理科教育については、のちに極地方式の高橋金三郎を紹介されて、師事することとなった。

しかしながら、1年目は、それどころではなかった。環は、授業がにっちもさっちもいなくなり、「もう迷いに迷って、ぐっちゃぐっちゃになって、もう辞めようかな」（②39頁）というところまで追い込まれた。困り果てて自らの両親にも相談した。すると、「3年やってダメだったら辞めていいけど、1年ぐらいで、音を上げたらダメだ」（②40頁）と諭され、とにかく3月まで踏ん張ることにした。そして、2年目の春の新学期の職員会議のあと、自分を変えたいと思い、「私のどこが悪いんでしょう」（②40頁）、「個人的なものですけど、私の問題を考えて下さい」（②41頁）とすべての同僚、先輩教師にアドバイスを求めたという。すると、同僚、先輩教師から、「気取ってる」（②41頁）、「まず、[地元の]言葉を覚えろ」（②43頁）、「もっと先生らしい洋服を着るように」（②45頁）といった厳しい意見を浴びせられた。その多くは授業での工夫ではなく、とにかく村の人々の生活を知り、そのなかに入るようにというアドバイスだった。「それがあなたの、この、子どもとじっくりいかない、原因なんだ」（②52頁）と言われたとき、はじめて涙が出たという。当時の親たちは、授業参観になると、「一生懸命協力して」（②49頁）、教師たちを応援し、校長先生から教師が叱られないようにかばってくれていた。まずはこの親たち、子どもたちの生活の現実に歩み寄ることが、環の教師としての課題として突きつけられたのである。

（八）結婚、出産、教師としての転機

そして、環は、2年目に今度は誰のせいにもできない1年生を担当することを希望した。環が本気になったことを認めたのか、2年目になると、斎藤喜博は、交換授業を企画し、環が当時の島小の花形教師だった船戸咲子、武田常夫らから授業を学べるようにしてくれた。「一人前の教師になるための手立て」（②72頁）を斎藤喜博が準備してくれたのである。さらに、環自身が、校内研修で、「『手の空いている先生指導して下さい』って言って、1ヶ月に3回ぐらい」（②92頁）のハイペースで先輩教師から授業について学ぶ機会をもったという。

3年目は、2学年に持ち上がりとなり、そこではじめて島小公開研究会で研究授業を担当させてもらえることになった。同時に、教育実践記録を執筆する機会ももらえることになった。研究授業は、環の専門である理科の虫眼鏡の授業だった。斎藤は環の理科の授業を高く評価していたようである。環にとって、研究授業を任せられたということは厳しかった斎藤校長に認められたということであり、「本当にうれしい」（②75頁）ことだったという。この頃、環は斎藤校長に「わかんないことが一つあります」（②92頁）と質問したところ、「わからないことがあるってことは、わかることもあるんだ」（②92頁）と褒められたとい

う。環の地道な学びと教師としての変容を、斎藤はしっかりと観察していたのである。

4年目は、そのまま3年生に持ち上がりとなり、「その年までものすごく意欲的にやった」(②94頁)という。「全生活が授業」(②95頁)という毎日だった。だが、この時期に、新任期の緊張感が薄れて、「マンネリになってきた」(②96頁)と感じ、「これじゃダメだと思って」(②96頁)、もう一度、1年生からやり直すことにしたという。

そして、5年目の4月、斎藤喜博の紹介で、撮影のために島小に入っていた写真家の川嶋浩と結婚することになる。こうして児島環は、川嶋環となるのだが、この結婚については、「その頃授業で夢中でしたからね」(②99頁)、「もう夜中でもなんでも、指導案書き始めたら、それで文句言わない人なら誰でもいいと思ったんです」と語っている。結婚生活が始まると同時に、授業もより高い質を求めて、過酷になり、加えて原稿執筆の仕事も入り、厳しい日々が続いた。宿泊の研究会でも深夜まで厳しい学びがなされた。

夫の川嶋浩は、写真家の田村茂に師事し、カメラマンとして島小の子ども、教師の姿を追っていた。川嶋浩による島小の教師と子どもの記録である写真集『未来誕生』(麦書房、1960)は、今もなお島小の教育実践を語り継ぐ貴重な記録となっている。どちらも仕事に打ち込む人生であったが、浩と環の間には、二人の男の子が与えられ、その夫婦生活は、浩が2003年に亡くなるまで続いている。

4月に結婚式を挙げた川嶋環は、翌年の6月に長男を出産している。カメラマンの浩とは別居生活であったから、母子家庭のようなものだった。そして、乳飲み子を育てながら、迎えた教職生活6年目は、教師としての大きな転機となった。この年、2年生に持ち上がり、公開研究会の研究授業を担当するとともに、理科教育の研究者である高橋金三郎との出会いもあった。そして、何よりも母になって、一人ひとりの子どもの命の重さを痛感し、子どもたちに対する観方が大きく変わったのだった。

川嶋) で、あの、2年生の時、私なんの授業したろう。

高井良) うーん、「花から実」っていうのもあるみたいですね。

川嶋) あっ！ そう！ これがね私の人生の転機なんです。

高井良) あー、はい。

川嶋) っていうのはね、あの、子ども、育てながら教師でしょ？

高井良) うん、はい。

川嶋) もう、とても大変なんですよ。

高井良) 確かに。

川嶋) その頃は、保育園もない、乳児保育なんかなかったから自分たちで乳児保育を作
って。

高井良) なるほど、作って。

川嶋環のライフヒストリー（I）

川嶋）今みたいにあんなに、恵まれないから、子どもを育てながら教師をやるっていうのはとても大変で。

高井良）そうですね。

川嶋）うん。それである、命、やっぱり命の尊さっていうのをね、子どもを持って初めて知るわけですね。（② 128 頁）

産休明けて教室に入ったとき、目の前の子どもたちにはすべて親がいて、「その親にとってはかけがえのない大事な子どもなんだって」（② 129 頁）ということを感じたとき、教師生活の転機を経験したというのだった。そこでつかんだことは次のようなことだった。

「教師っていうのは、勉強をもちろん教えるんだけど、その知識を教えるんじゃなくて、その中で、人間を育てていくんだということがね、初めてわかるんですよ」（② 129 頁）

「花から実へ」という授業は、このような命の重さについての川嶋の思いに裏打ちされて、植物がその命を守り、次世代に伝えていく仕組みについて学ぶ生物の授業だったのである。

「初めてこの教材の選択の理由っていうのが、自分で、あの、心からわかるわけですね。で、この、この教材があるから、教えるんじゃなくて、やりたいから、やるんだっていうようなね。だから、ここが私の一番の人生の、教師としての、ふりだしですね。」（② 129-130 頁）

母となり、川嶋は、自分の子どもへの愛情が、教室の子どもたちへの愛情に広がっていることを、感じていた。このあとも、川嶋の授業には、母親であることの優しさと温もりが宿るようになっていた。

それでも、乳飲み子を抱えながらの、教職生活は並大抵のことではなかった。当時は、全国初のゼロ歳児保育施設が三鷹で開所したばかりで、群馬にはそのような施設はなかった。ところが、さくら・さくらんぼ保育園の創設者である斎藤公子との出会いがあり、「子ども面倒見るから、深谷おいで」（② 132 頁）と声をかけてもらい、長男を預かってもらいながらの教職生活だったという。ちょうどこの時期、斎藤公子は、自宅の一室を開放して、保育活動を始めようとしている時期であった。リズムあそび、描画、語り聞かせなど、斎藤公子の保育思想と実践は、その後、全国に広がっていくのだが、この頃、斎藤公子は、斎藤喜博の実践に賛同し、島小に時々顔を出していたという。その縁で、川嶋は斎藤公子と出会い、子どもの保育を依頼することになったのである。それでも、まだ施設やスタッフが整っていない草創期だったから、朝早い時間には「まだ保母さん来てないですよ」（② 132 頁）と

いうこともあり、「乳母車に乗せ、寝かせて、あの、保育園の前へ、庭先に置いて行っちゃうわけです」(②132頁)というような、綱渡りの生活だった。

そのような子育てと教職生活の両立のなかで、島小では、斎藤喜博の提案で、すべての教師が文学の授業に挑戦するようになっていた。斎藤からは、文学を通して人間の弱さを学ぶようにということで、太宰治やドストエフスキーを読むように薦められたそうだが、産休明けの川嶋は林芙美子の小説を授業で扱った。「めちゃくちゃな授業だったの覚えてる。怒られたんだね」(②144頁)というように、専門の理科の授業と比較すると、文学の授業はまだまだこれからだった。

出産の一ヶ月前に川嶋は研究授業を行っているが、その時は、斎藤に『『とても良い授業だった。』って言われた』(②158頁)という。がんばり屋さんで体力もあった川嶋は、出産ぎりぎりまで仕事をしたいと希望していたが、斎藤は、ほかの女性教師たちのためにも、きちんと産休の間、休むように諭したという。そして、出産を経て、産休のブランクのあとの教職生活は、川嶋にとっても大変な経験であり、以前と同じような仕事の水準に回復するためにはずいぶんと苦労したらしい。そして、産休明けというのは、どんな女性教師にとっても厳しいものだと、川嶋は語っている。このときの経験がのちに出産、育児と仕事の両立に悩む後進の女性教師への優しさにつながっている。

出産のあと、高橋金三郎のアドバイスを受けて教材研究を行い、理科で「溶解」の授業を行ったときには、斎藤喜博の自宅に泊まり込んで授業案を作成したこともあった。斎藤は、「溶ける」「とろける」「溶解」の違いを明確にして、「その言葉の意味をきちんと定義」(②166頁)するようにという指導を行ったという。その結果、子どもたちの疑問を引き出し、子どもが本気になって追究するような授業ができたのだった。その時の子どもたちは、「覚えているんです、あの授業、全部」(②170頁)というように、今もあのときの授業が深く心に残っているという。

斎藤が教師たちに求めたのは深い授業にとどまらなかった。授業のあとで、実践記録を書くことも求めたのである。原稿を書くのがつらくて、「牛はいいな」(②173頁)とつぶやきながら、綴ったこともあったという。この時の実践記録は、『島小の授業』に掲載されている。

この時の教え子の一人が、のちに理系の研究者として活躍することになるが、彼は研究者になったあとで、「[自分の]研究の原点は小学校時代にあるという手紙」(②176頁)を恩師の川嶋に送ってくれたという。「結論は出してくれなかったけど、こういう考えも、こういう考えも、こういう考えもある」(②177頁)という川嶋の授業が、研究の本質を教えてくれたというのである。

（九）島小を去る

川嶋はまだまだ齋藤喜博から授業について学びたいと考えていた。ところが、齋藤校長が急に島小を去ることとなり、そのことを知った川嶋はずいぶんと気落ちしたという。その様子を、先述の研究者になった教え子は、「3年生まであんなに生き生きしてい[たのに]、4年[に]になったら、ぜんっぜん授業つまんなかったよ」（②195頁）と語ったそうである。川嶋にとって齋藤喜博の影響力はそれほどまでに大きかったのである。

「もう齋藤先生いなくなったら、本当に、なんか、目標がなくなっちゃったみたいなの」（②196頁）喪失感を感じたという。同じ年に船戸咲子も島小を去り、次の年に武田常夫も齋藤喜博が校長を務めていた東小に移り、島小も様変わりしてしまった。このような状況で、川嶋はこれ以上島小にいる意味を見出せなくなり、東京都の採用試験を受験し、夫の実家のある東京に移ることを試みる。

ところが、採用試験には合格したものの、島小の齋藤喜博のもとで教師をしていたということで、ほうほうの学校から色眼鏡で見られて、赴任校がなかなか決まらなかったという。残念なことだが、教育の世界には、従来の常識に挑戦する人々への偏見、先入観が根強くあったのだ。行き場がなくなるなかで、齋藤も群馬で引き受けてと言ってくれたそうだが、最終的に、齋藤喜博の群馬師範時代の同級生が教育長をやっていたということで、新宿区の四谷第三小学校に着任が決まった。ところが、これは「辞令が出たのが、4月」（②204頁）という慌ただしさであった。川嶋にとって、群馬から東京に移ったことは、齋藤と島小に育まれた第一の教職生活に別れを告げて、新たに自分の力で出発する第二の教職生活の始まりだった。インタビューにも次のような語りのくだりがある。

高井良） これからはなんか、自立の旅が始まっていくわけですね。

川嶋） 自立、そうです。だから、四谷移った時、もうこれは自立だ、と思ったんです。

（②215頁）

新宿は全く知らない土地であり、「だれも、引っ張ってくれる人いない」（②216頁）場所でのスタートだった。しかしながら、そこに赴任してみて、かつて大学の指導教官がくれた「齋藤先生のもとでね、一生懸命勉強しておけば、どこの学校行ったって通用するよ。だから、文句言わずに一生懸命勉強しな」（②218頁）という助言の通り、確かに力がついていたことに気づいたという。島小で鍛えられた授業を構成し、子どもたちを伸ばす力は、東京でも通用したのである。

ある時には、家庭的に恵まれない子どもをケアしていた川嶋に、わがママを許していると

いう母親たちからのクレームもあったが、川嶋は一步も退くことがなかった。そして、次のように言葉を返したという。

[1年間終わったときにわがままなままだったら謝りますが], 「この子たちが、きちっとしたクラスになったら、あんたたち謝って下さい」(② 221 頁)

このように一步も譲らず、突っぱねたのである。退いたら負けだという斎藤の教えが支えになったのである。そして、川嶋の見通しの通り、1, 2年と持ち上がるなかで、このクラスはとても雰囲気の良いクラスになり、一体感が生まれたという。そして、卒業してから10年ほどたった日に、三鷹の小学校での川嶋の授業が毎日新聞に掲載されたとき、「親から感謝の手紙が来ました。『新聞見ました。』って。『あの時、あんなこと言って、申し訳なかったと思います。』って」(② 224 頁) という出来事があったという後日談が語られた。この時の母親たちは意見も言ったが、「下の子が生まれた時は、この前も話したけど、ちゃんと家まで来てくれましたよ。『おめでとうございました。』って」(② 225 頁) というように、しっかりと教師を支えてくれることもあったという。保護者も立派であったが、島小で培った川嶋の授業と子ども理解の確かさは、大都会の新宿でも十分に通用したのである。

おわりに

今回の研究ノートでは、川嶋のライフヒストリーの前半を叙述した。1930年代生まれという世代的な宿命のゆえに、川嶋の少女時代には、戦争の影響が色濃く映し出されている。地方の裕福な家庭の末娘として生を受け、何不自由ない少女時代を過ごしたものの、敗戦と農地改革によって、その生家は財産を失っている。この時代経験が、川嶋に職業人としての自立を促すことになった。人生に対して前向きな川嶋は、戦争がもたらした変革をむしろポジティブなものとして位置づけている。実際に、敗戦後の教育(学制)改革によって、女性も大学進学が可能になり、女性が専門職に就く道も拓けたのである。

小学校(国民学校)時代には勉強嫌いだった川嶋は、自立のために勉学に勤しむようになった。そして、高校時代には、新しい時代を創出する意気込みに燃えた若き教師たちの支援の下、大学進学を志し、群馬大学に入学する。その後、教育学部に進学した川嶋は、小学校のみならず、中学校、高校の教育職員免許を取得したのだが、斎藤喜博校長の下で教育について学びたいと考え、島小に赴任する。

1年目に6年生を担当した川嶋は、授業、学級経営に苦心惨憺するが、2年目に自分をさらけ出すところから再出発を試み、島小の同僚や斎藤校長に鍛えられながら、自分の授業を少しずつ創造していった。一番の転機は、出産であり、子どもを授かったことで、教育の目

川嶋環のライフヒストリー（I）

的としての「いのち」を実感することとなった。そして、理科教育において「いのち」を見つめる授業を追究するとともに、「いのち」を育むことを教師としてのアイデンティティの軸として、教師としての人生を歩むことになる。

島小での経験は、川嶋の教職生活において決定的なものであったが、島小での経験から川嶋の教師としてのアイデンティティを構築させたものは、敗戦を通じた自立への意志と出産というライフサイクル上の個人的な経験であった。

今回の続編では、東京の新宿、三鷹での教職生活を綴っていきたい。ここでは、文学教育、表現教育など、島小で培った授業についての学びを土台とした、川嶋の教育実践の新たな展開が見られることだろう。

（謝辞）

本研究は、川嶋環先生の弛まない人生と惜しめない語りに多くを負っている。今回のインタビューにおいても、後進の学びのために多大な時間を割いて、貴重な経験を語って下さった。また、本研究では、東京経済大学個人研究助成費（14-20）からの援助を受けた。上記して厚く感謝したい。